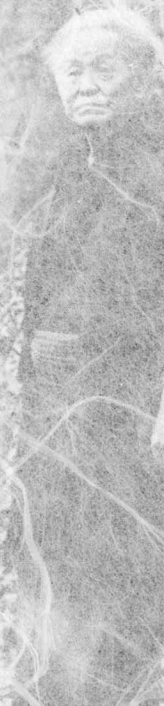


中谷孝雄全集

第二卷

中谷孝雄全集



中谷孝雄全集 第二卷

昭和五十一年二月二十日

著 者 中谷孝雄

編 集 第一出版センター

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区青羽二丁目二二番地
電話東京〇三九四五一一二二（郵便番号一〇二二）
（大代表） 振替東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三五〇〇円 落丁本・乱丁本はお取替します。

©中谷孝雄 昭和五十一年 Printed in Japan (特)

中谷孝雄全集 第二卷

目次

業平系図

七頁

才女の運命

三三七頁

妄執

三六九頁

敗者の歌

四一三頁

解説 駒田信二

四五三頁

口絵写真撮影・講談社写真部 黒田一成

昭和51年12月 新座市・野火止にて

装幀 岩本正雄

中谷孝雄全集

第二卷

業平系図

春やむかしの

女は年が明けて十五歳になつたばかりだつた。名を高子たかこと言つた。権中納言藤原長良ながらのむすめだつたが、どういふ訳からか東五条の叔母の皇太后のもとに引取られて寢殿の西の対に住んでゐた。業平が彼女のもとへ通ひ出してからまだ三月ばかりにしかならなかつたが、その頃になつて初めて堅い薔が薄紅を破つたやうな趣が見えて、業平はまたなきものに愛してゐた。

ところがある日、いつもより早くまだ空の明りが残つてゐる時刻に車を急がせて訪ねて行つて見ると、これはまた何としたことか、彼女が住んでゐた西の対はすっかり空家になつて、愛する人の姿はおろか、日頃彼女が手なれた家具や調度の類も悉く運び去られてゐた。あまりの不思議さに人を呼んで尋ねてみると、

「けさほど従姉の女御様たよこからのお呼びで、急にその方へお移りになりました」

と、皇太后に仕へる女房の一人が出て来て答へた。

「では内裏へ？」

女房は気の毒さうに頷きながら、

「大そう名残を惜しまれて、お車に召されてからも、涙をいつばい浮かべて、かへりみがちに出ておいでになりました」

「それにしても唐突な……」

業平は思ひに沈むひとり言だつた。

「全く火急のことでございまして」

女房の語るところによると、けさほど女御からの使者として高子の兄の左兵衛佐基経がやつて来て、突然のことにただ驚き呆れてゐる彼女を無理になだめすかすやうにして、あわただしく連れ去つたといふのだつた。

「聞くとところによりますと、内裏わたりのことをお見習ひになるために、女御様のおそばで暮しになるのださうでございます」

それ以上のことは女房も知らなかつた。

業平は前栽のたそがれにしきりに匂つてゐる梅の一枝を、高子の形見ともなく折りとつて門を出た。

「遠ざけたな」

車の中でひとり呟いた。女御が呼びになつたといふのは表面の口実で、基経が女御の父で同時に彼の養父である右大臣に謀つて、業平の手の届かない所へ彼女を遠ざけたのに違ひなかつた。右

大臣藤原良房は基経の実父長良の弟であつたが、機略に富む彼は出世も早く、兄を越えて大臣になり氏の長者を兼ねた。しかし子には恵まれず、ひとりむすめの女御明子の他に男の子がなかつたので、兄の三男である基経を養子にしてゐた。良房が選んで養子にただけあつて、基経も若いかなかなかのやり手だつた。

業平は先に東宮争ひの事件があつて以来、右大臣良房に対しては強い敵意を抱いてゐた。その事件といふのはかうだつた。今上（文徳天皇）が御即位になつた時、すでに三人の皇子がおりになつた。第一皇子の惟喬親王は紀名虎のむすめ更衣静子のお産みしたところで、時に七歳であらせられたが、天皇はこの皇子を大そう御鍾愛になつて、皇太子に立てようとの思召であつた。ところが御即位の後五日目に、良房のむすめの女御明子が第四皇子惟仁親王をお産みしたので、事は面倒になつた。

良房は右大臣の権勢にまかせて我が外孫の第四皇子を皇太子に立てようとした。しかしいかに何でもお生れになつたばかりの皇子をすぐ皇太子にとはいひ出しかね、それに天皇の思召が惟喬親王にあることが分つてゐるので、あまり無理なことは出来なかつた。そこで立太子の議を持ち出すことは暫く時期を待つてからにすることにした。

一方紀氏の一族ではあくまで惟喬親王の立太子を期待した。それは天皇の思召であり、また順序からいつても第一皇子がお立ちになるのが当然だつた。紀氏一族の運命にも関する重大問題でもあつた。紀氏は武内宿禰から出た上古の雄族であつたが、奈良朝の初頃から藤原氏の擡頭によつて次第にその勢力を奪はれ、今では政界の第一線から完全に蹴落されてしまつてゐた。従つて彼等が惟喬親王の立太子、ひいてはその御即位に家運の挽回を夢みたのもあながち無理ではなかつた。

しかし静子の父名虎は前年すでに亡くなつてをり、その子の有常はいふに足りない微官だつたので、どう廟議に参与する資格もなかつた。彼等の頼みとするところは、ただ天皇の思召が惟喬親王にあるといふことだけだつた。いや必ずしもさうとばかりはいへなかつた。一族出身の僧眞済が夙に天皇の深い尊信を得て内道場に供奉してゐた。当時宗教の力は往々政治をも凌ぐものがあつたので、これは大いに頼みとするに足りた。

眞済は空海（弘法大師）の高弟で、真言密教の秘法を悉く授かり、法力抜群の僧であつた。紀氏の一族では早速彼に依頼して、惟喬親王の立太子を促進成就せしめるための祈禱をさせることにした。眞済とてももとよりそれは望むところで、ここに日頃住持する高尾の神護寺に籠つて、法力の限りを傾けて一大祈禱を修することになつた。

その噂が伝はると、右大臣良房の方でも捨てておくことが出来なくなつた。当時仏教が人心を支配してゐたことは非常なもので、良房のごとき権勢並びなき人物でさへ、眞済の法力を恐れない訳にはいかなかつた。たとへ王法をないがしろにすることは出来ても、仏法を等閑にすることは出来なかつた。殊に良房が最も恐れたのは、眞済が呪詛の法によつて惟仁親王の御命を縮めはしないかといふことだつた。そこで彼は同じく空海の高弟でその実弟である僧眞雅に依頼して、親王の御安泰と兼ねてその立太子の成就を祈らしめることにした。

かうして東宮争ひのことは宗教界にまで飛火して、やうやく世人の耳目を聳たしめるに至つた。日頃藤原氏の権勢を快く思つてゐない人々は多く紀氏に同情した。殊に業平は紀有常のむすめを妻にしてゐたので、終始心からの同情を紀氏に惜しまなかつた。

業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子で、母は桓武天皇の皇女伊登内親王であつた。従つて本

来なら王と称すべき身分であつたが、當時は皇子・皇孫の姓を賜つて臣籍に降る者が多く、業平も兄の仲平、行平、守平等と共に在原の姓を賜つて臣列に入つたのだつた。さういふ身分の高い彼ではあつたが、何分にもその頃はまだ二十六歳で、位はやつと従五位下、何程の力を紀氏に貸すことも出来ず、徒らに切齒扼腕するばかりだつた。

そのうちに東宮争ひのことは、真雅の法力が真済のそれに勝つてゐたためか、やがて突如として惟仁親王の立太子が宣せられたことによつてあつて終止符を打つた。もとよりこれは右大臣良房の権謀の勝利だつた。良房に取つて微力な紀氏などは最初から問題ではなかつた。彼としてはただ天皇のお心を動かしさへすればよいのだつた。そのためには真雅の祈禱もむろん必要ではあつたが、それは寧ろ惟仁親王の御命の安泰を祈らせることに主眼があつた。現実には他にいろいろ尽すべき方法がいくらかあつたのだ。

第一に彼は天皇の外伯父といふ有利な立場にあつた。彼の妹の順子は先帝の皇后で今上の御母であつた。東五条の皇太后といふのがこれである。従つて彼は皇太后にお願ひして天皇を説いてもらふことも出来た。或ひは自身でそれをするのももとより可能であつた。しかし自分や自分の一族が表面に立つて動いたのでは、みすみす天皇を藤原一族で圧迫するかのやうで具合が悪かつた。

ところが良房に取つて都合がよかつたことは、当時左大臣は源常、大納言は源信、中納言は源定、安倍安仁、源弘といふふうで、政界の上層部は殆んど源氏——嵯峨天皇の皇子によつて占められてゐることだつた。そして良房はこれまた嵯峨天皇の皇女源潔姫を妻にしてゐたので、いはば彼等とは義理ある兄弟であり、その親しみも深かつた。今日源氏の人々が揃つて政界の上層部に進出することが出来たのも、むろんここ数代の天皇のお引立によるところではあるが、機略に富んだ良

房が同族の人々を多く犠牲にしてまで彼等とがつちり協力して来たことが大きい力になつてゐた。

良房はその関係を利用して、自分や自分の一族は少しも表面に立たず、彼等をして或ひはそれとなく、或ひは直言をもつて天皇を説かしめ、やがて天皇のお心が動揺するのを待つて、一挙に立太子の議を押し切つてしまつたのだつた。いかにも巧妙な、そしてあくどいやり方であつた。

東宮争ひの敗北によつて、紀氏一族の家運挽回の夢は敢へなく破れ去つてしまつた。業平は彼等一族の銷沈の様子を見るにつけても、ひとごとでなく悲憤の涙を流さずにはゐられなかつたが、良房のあくどいやり方の全貌が次第に明かになつて来るにつれて、その怒りは火と燃え上つた。一時は良房の参内を途中に擁して一矢を報いようかとさへ本気で思つたが、かりにそのことが成功したとしても、結果は却つて惟喬親王の御為めによくないことに考へ及ぶと、残念ながらそれも中止しなければならなかつた。

それに紀氏一族の棟領であり彼の舅である有常が、いかにも豪族の末裔らしい温厚な、優雅な、むしろ淡泊に過ぎるやうな人柄で、かりにも天皇の御名によつて発表された立太子のことに、たとへ内実はどうあつたにせよ、とかくの異議や抗弁を挟むことを好まなかつた。彼は今では寧ろ激昂する一族の若者どもをとり鎮めることに懸命だつた。かりそめな動きをしたために、いよいよ一族を衰運に導き、皇室にも累を及ぼした例は近き世にも決して少くなかつたのだ。

有常が何よりも心配したのは真済のことだつた。今度のことが彼の法力の敗北でないことは今では誰にも明かだつた。しかしさうかといつて彼が今までのやうな尊信を天皇に保ち得るかどうかは甚だ心許なかつた。右大臣一派の憎しみも彼に集中するであらう。悪くすれば追放、流刑の罪が彼を待つてゐないとも限らなかつた。けれどもそれがすべて有常の杞憂であつたことはやがて明かに

なつた。天皇の真済に対する親任はその後少しも衰へず、常に内道場に供奉せしめて顧問にそなへしめられた。良房とてもそれをどうする訳にはいかなかったのであらう。いふまでもなく天皇には今度の事件の成行に強い御不満を抱かれ、真済には寧ろ同情を惜しまれなかつたのであつた。

東宮争ひのことはかうして一段落を告げ、紀氏一族の若者の激昂も有常の慰撫によつて鎮まつた。業平とても今更ことを荒立てる考へはなく、良房に対する怒りもやうやく胸底深く畳み込まれて行つた。そして当時は藤原氏といへば悉く仇敵のやうに白眼視したものであつたが、それも日がたつに従つて思ひ過しであつたかのやうに和らいで来た。同じく藤原氏といつても随分不遇の者は多く、良房に対して快く思つてゐない人々も決して少くなかつた。

たとへば彼の同輩に国経くにつねといふ者があつた。国経は良房の兄長良の長男であつたが、弟の基経が良房の養子になつて羽振りのよいのに引きかへ、国経は一向振はなかつた。そのためか彼は良房に対しても基経に対しても決して快く思つて好意を持たず、いつも不平満々であつた。彼のいふところによると、彼の父長良も弟の良房に越えられたことを不満に思ひ、本来ならば自分が大臣・氏の長者になるべきであるのにと良房を恨んでゐるさうである。業平は特に彼を好きだつた訳ではないが、藤原一族の内状を聞くことには興味もあり、それに相手は年も二つ三つ下で気の置けない若者だつたので、会へば喜んで語り合ふといふふうであつた。ところがそれが不思議な縁となつて、やがて数年の後、業平は彼の手引によつてその妹の高子のもとへ通ふことになつたのだつた。

それにしても、と業平は思つた。国経は今日のことを知つてゐるのだらうか。今になつて基経が自分から高子を遠ざけたについては、何か思ひもかけない理由があるのかも知れなかつた。権謀家の良房が後ろについてゐてのことだから、何を仕出かすか知れたものではなかつた。もしや高子を

天皇にお進めしようとしてゐるのではないだらうか。もし仮りにもそのやうなことがあるとすれば、自分はどんなにしても阻止しなければならぬと思つた。一度自分のやうな者が愛した女を、主上の御帳の内に奉仕させてよい筈があらうか。

業平は思はず手にしてゐた梅の枝ではつしと膝のあたりを打つた。散乱した花の匂ひが噎せるやうに車の中の闇に漂ひ、業平は訳もなく急に悲しくなつて来た。声を上げて泣き出したくなるのをじつと我慢してゐると、涙がひとりでに頬に溢れてくるのだつた。

「ともかく国経のところへ行つてみよう」

ややあつて涙を拭つた業平は、さうひとりごちながら、牛飼に車の向きをかへさせた。

その頃国経は父の家を出て、姉小路西洞院のあたりに住んでゐた。業平を迎へた彼は、「さうですか、そのやうなひどいことをしましたか、少しも知らなかつたものですから、お知らせすることも出来ず、ほんとにお氣の毒なことをしました」

とただ恐縮するばかりだつた。

「多分さうだらうとは思つてゐましたが、やはり知らなかつたのですね。わたしは世間でも色好みの評判を立てられてゐる男だから、それを心配してあのひとを遠ざけられたのなら、それもやむを得ませんが、もしやあのひとを……」

業平はそこで言葉を切つて、相手の表情に目を注いだ。灯台の火を斜めに受けた国経の顔にはいささかも悪びれた様子はなく、業平に対する素直な好感と同情とを湛へてゐた。

「さうですね、あの人々のことだから、何を考へてゐるのか知れませんが、さし迫つてどうすると